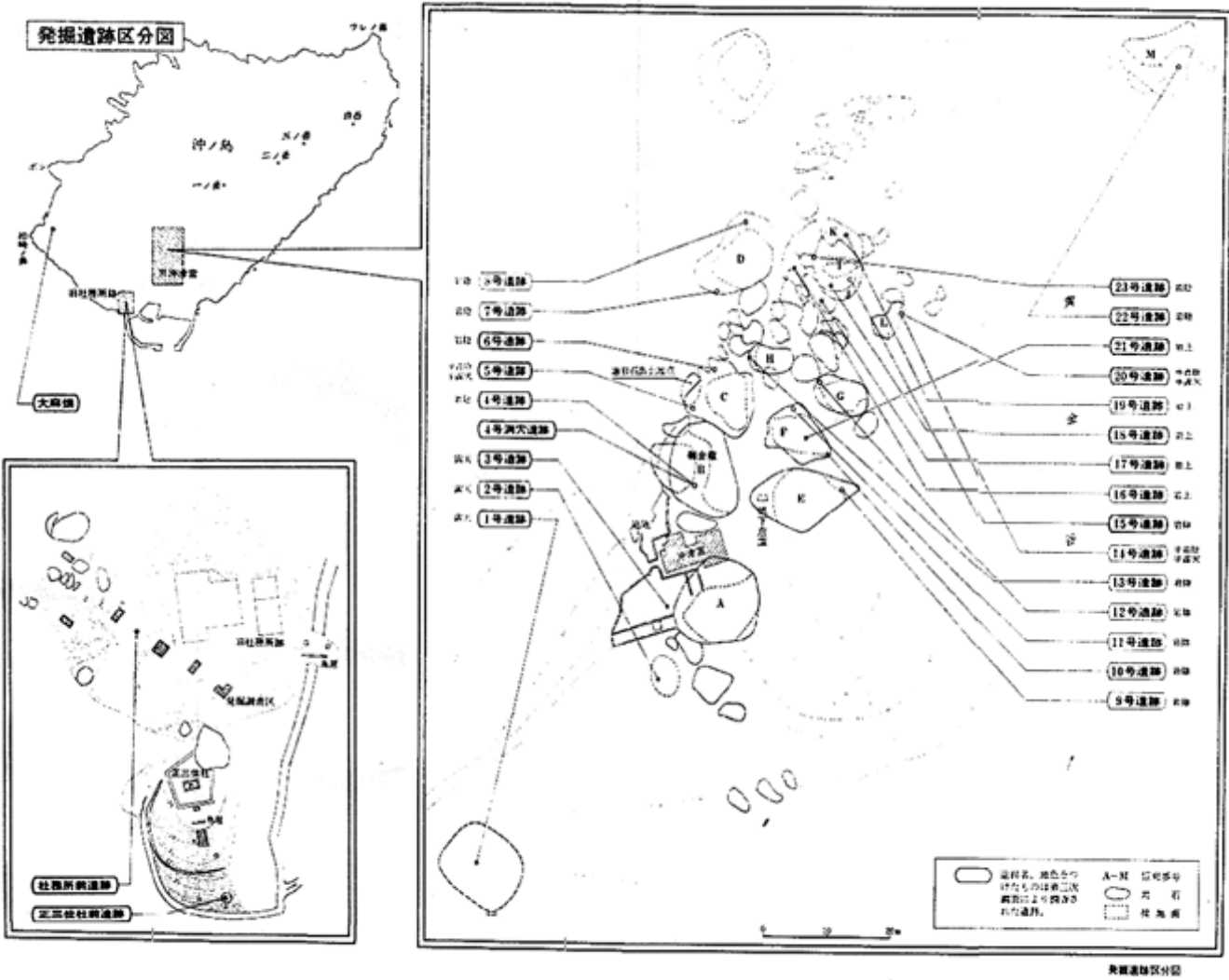
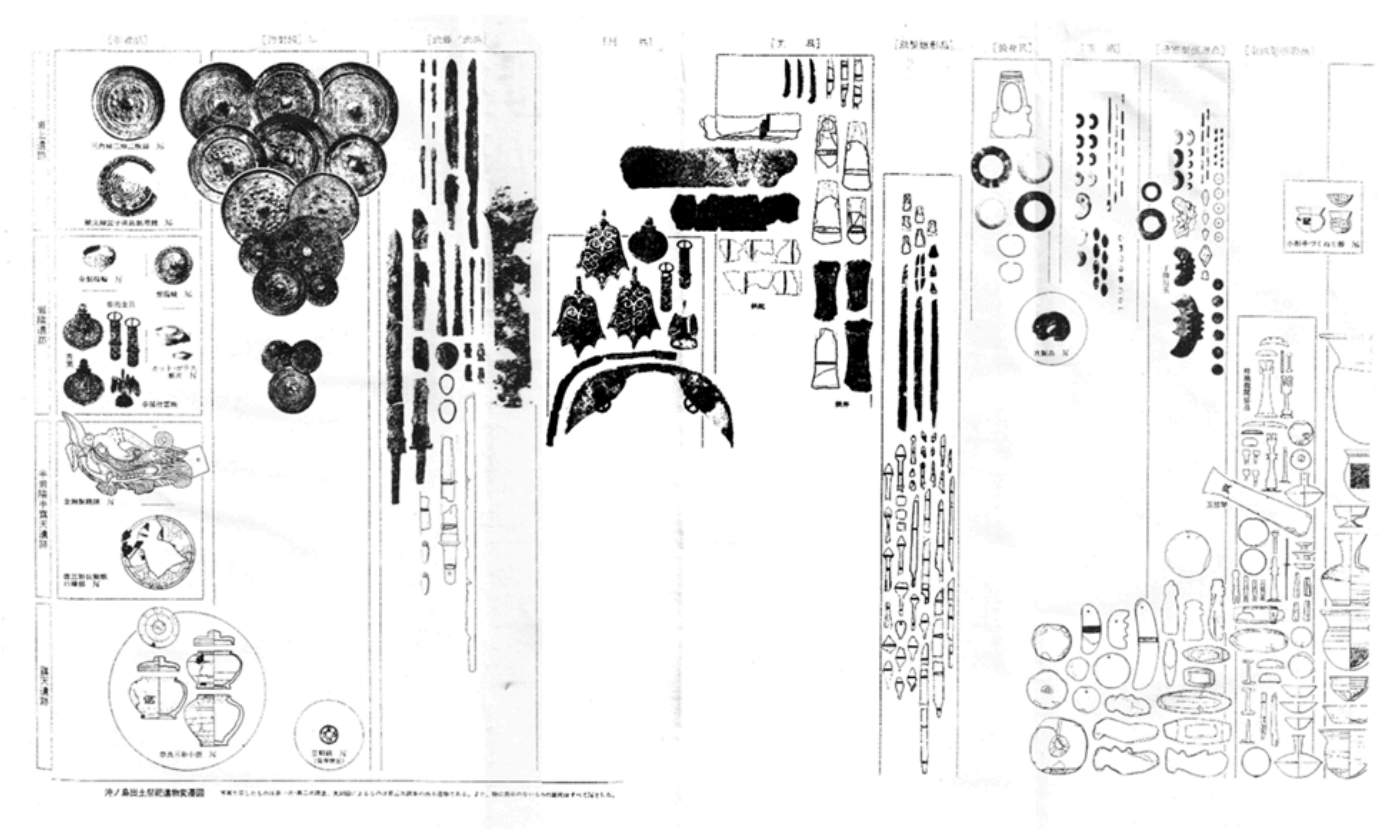


沖ノ島の発掘遺跡分布図



沖ノ島出土祭祀遺物変遷史



韓国の「沖ノ島」－竹幕洞祭祀遺跡

沖ノ島の祭祀遺跡は、古代日本における国際交流に際しての国家的祭祀の遺跡として知られ、豊富で豪華な出土品から「海の正倉院」とも呼ばれる。つまり、古代日本は、主として古代の韓国と、ついで古代の中国と国際交流を頻繁に行ったので、そのつど沖ノ島の神に、航海の安全を祈願し、また、感謝の意を込めて、種々の文物を奉献したのであった。

それならば当然、古代の韓国や中国においても、同じような祭祀遺跡があつてしかるべきであると考えられる。果して、1992年(平成4年)に、韓国において初めて、沖ノ島祭祀遺跡に比肩される祭祀遺跡が、国立全州博物館によって発掘調査されたのである。

ところは、韓国の西海岸地域に当たる全羅北道扶安郡辺山面格浦里竹幕洞に属する辺山半島の、海岸に突き出た岬の突端で、標高約22mの海蝕断崖の頂部に所在する。ここは、沖ノ島と違って立地が岬の突端であることと、沖ノ島では岩上から岩陰、半岩陰、半露天を経て、露天へと祭祀の場が変遷するのに対して、一貫して露天であつたこと、そして、統一新羅時代の8世紀には祭祀建物があつたことなど、両者には相違点がいくつか見られる。とはいえ、東中国海を舞台とする壮大なスケールの国際交流に際して執り行われた祭祀の遺跡という点では、両遺跡に共通性が認められる。

さて、竹幕洞の祭祀遺跡は、古代において、沖ノ島の場合と同様に変遷が見られる。まず、原三国(馬韓)時代の3世紀後半のころから始まったと思われる土器を用いた祭祀は、三国時代の百濟前期に当たる4世紀中ごろから5世紀前半にかけてのころ、本格化する。つまり、壺・甕や高坏などの土器を使って祭祀が行われた。土器にはもちろん、神に捧げるために用意された酒や山海の珍味などの飲食物が盛られていたことであろう。ついで、5世紀の中ごろになると、沖ノ島の出土品と酷似した有孔円板・蟬形品(剣形品)・鏡・短甲・刀子・斧・鎌・勾玉・鈴などの石製模造品が使われ始める。ちなみに、材質は沖ノ島では滑石製であるのに対して、竹幕洞はほとんど片岩製である点が異なる。これらの石製模造品は、『日本書紀』の記事などから類推して、神木に掛けて祭祀が行われたのであろう。そのころから6世紀前半にかけて、竹幕洞における祭祀は最高潮に達したと思われるほど、多量の土器が出土する。そればかりか、土器は壺・器台・甕のほか、杯・高坏など種類が多くなり、また、大型の甕の中に鏡・武器・農工具・馬具などの金属製品を納めて奉献したりしている。なお、土器の中には、ごくわずかとはいえ、倭の須恵器系統の土器も含まれる。鏡は百濟の小型銅鏡と鉄鏡である。

武器は鉄剣・鉄矛などであり、また、農工具は鉄斧・鉄鋤などである。そして、馬具は鞍金具・杏葉・馬鐸などである。最後に、前述のとおり、統一新羅時代に当たる8世紀のころには祭祀用建物が出現していたといわれるが、土馬や土偶はそのころのものであろうか。竹幕洞では、古代以後も中・近世の高麗・李朝(朝鮮)時代を経て、現代まで信仰が生き続けている。現在、竹幕洞遺跡の上には1864年に創建され、その後も4回にわたって増改築が繰り返された水聖堂と呼ばれる小祀が建っている。つまり、周辺住民が豊漁と航海の安全を祈って女神を奉賛しているのである。

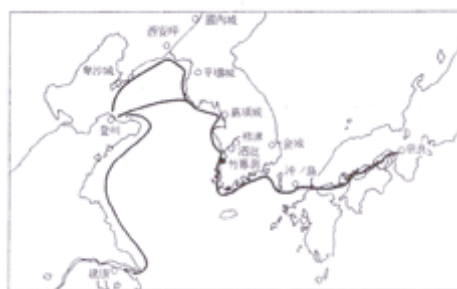
ところで、竹幕洞における古代祭祀を振り返ると、当時の国際交流の諸段階が浮かび上が

つてくるのである。まず、3世紀後半では、帯方郡を通じての魏・西晋と馬韓・倭との交流が背景となっている可能性がある。ついで、5世紀中ごろから6世紀前半といえど百済と倭の密接な交流の時期に当たる。とくに、5世紀中ごろから後半の時期には、いわゆる倭の五王による中国・南朝への遣使が行われた。一方、百済も4世紀中ごろから6世紀にかけて、中国の南朝と頻繁な外交関係を展開した。このことは、竹幕洞遺跡における南朝の青磁壺や黒褐釉甕などの出土からも裏づけられる。また、竹幕洞遺跡で出土した馬具のうち、亀甲繫文龍・鳳凰透彫の鞍金具や剣菱形の杏葉は、たとえば加耶古墳の陝川玉田M3号墳出土のそれらに共通する。土器についても、僅少とはいえ加耶土器の系統のものが見出せることも見落としてはならない。これらの事実は加耶と百済の交流を物語る一方、479年に加羅王荷知が南齊に通交したという記録を参考にすると、加耶の南朝への遣使に際して、竹幕洞で祭祀が行われた可能性も考えられるのである。最後に、統一新羅時代の8世紀といえど、古代の韓国や日本は中国へ盛んに遣唐使を送った。竹幕洞は、そのときも外交のルート上に位置したことばいうまでもない。

このように見てくると、主として百済の竹幕洞における祭祀遺跡と、その出土遺物は、中国の南朝と百済・加耶・倭、そして、百済と加耶・倭の間で展開した国際交流の一端を如実に物語ってくれる。ひるがえって日本における竹幕洞に相当するのが沖ノ島であってみれば、古代の日本が、古代の韓国や中国の先進文明を受容するに当たって沖ノ島は大きな役割を果たしたといえよう。



韓国 竹幕洞遺跡 遠景

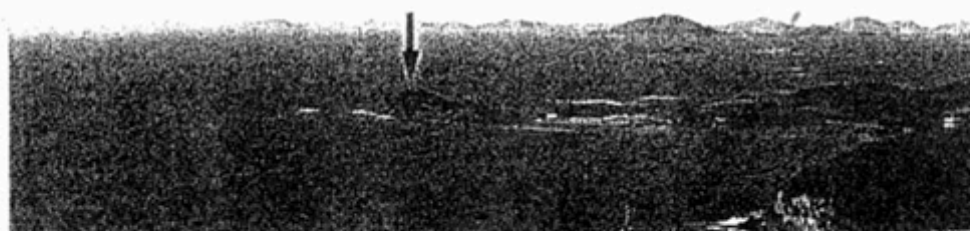


遺跡位置 古代航路

竹幕洞遺跡の位置



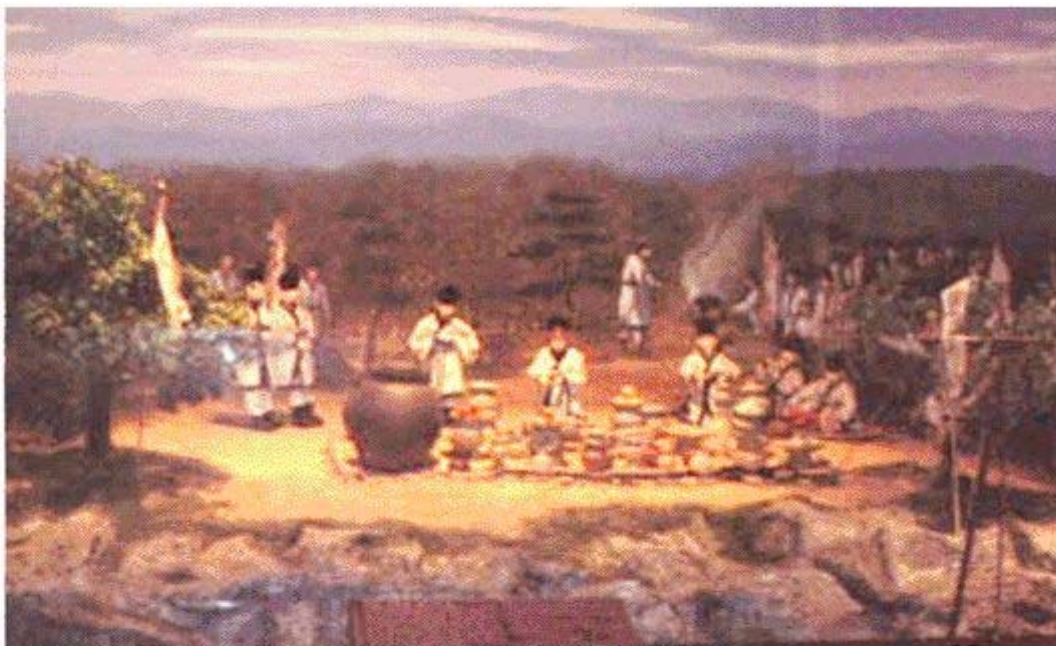
1 遺跡の位置と古代航路抗路



2 遺蹟遠景(南→北)

国立全州博物館、1995 『**한국의 祭祀—扶安 竹幕洞 祭祀遺跡—**』

竹幕洞遺跡の祭祀復活図と各種土器類



1 復原図 祭祀光景 RECONSTRUCTION OF THE RITE 復元された祭祀光景

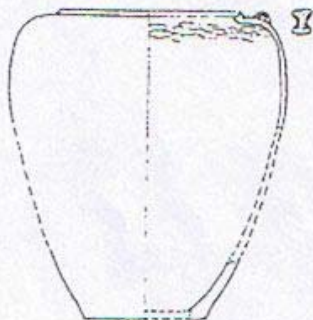


2 5-7世紀代の各種土器類 POTTERIES OF 5th-7th C.A.D. 5-7世紀代の各種土器類

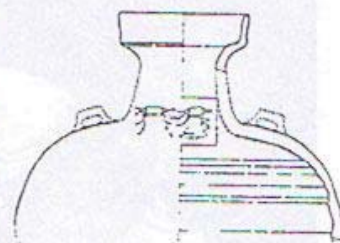
竹幕洞遺跡の石製模造品と壺類



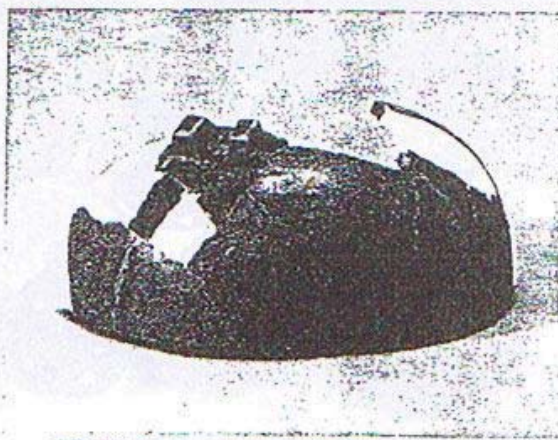
各種 石製模造品 MINIATURE EFFIGIES, Stone



青磁耳附盤口壺 出土狀態 APPEARANCE OF JAR WITH EARS, Celadon

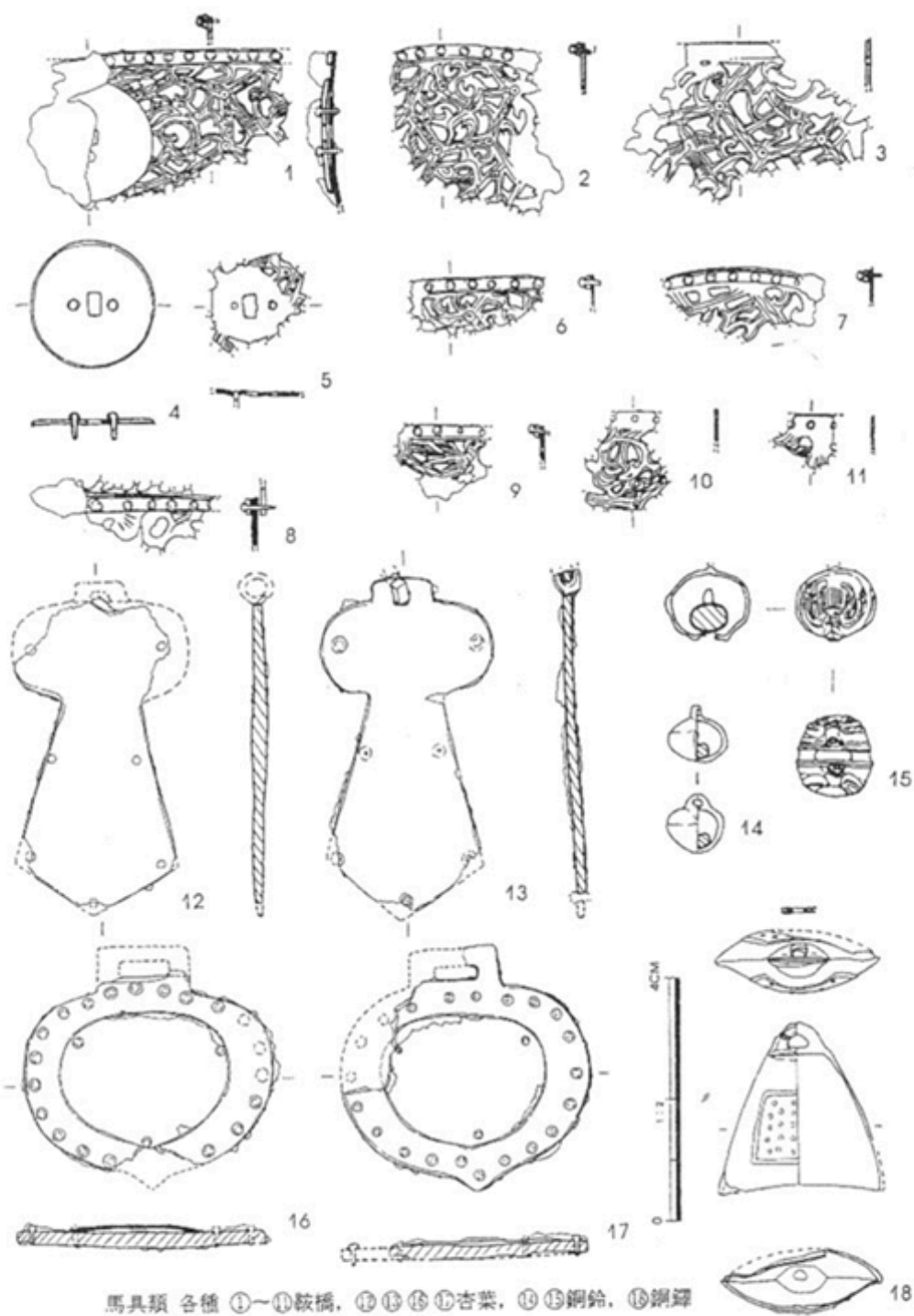


黒褐釉壺 JAR,



青磁耳附盤口壺 JAR WITH EARS, Celadon

竹幕洞遺跡出土の馬具類



馬具類 各種 ①-⑪鞍橋, ⑫⑬⑭⑮杏葉, ⑯⑰銅鈴, ⑱銅鐙

九州とシルクロード

ー沖ノ島と李賢墓ー

西谷 正

玄界灘のまっただ中に浮かぶ沖ノ島が、海の正倉院とも呼ばれるようになったのは、1954年の第1次から1971年の第3次まで、十数回にわたって実施された発掘調査の結果、そこが海神を信仰する島として、長期にわたる祭祀遺物が大量に包蔵され、また、その内容が超一級品であることがわかってからのことである。そしてそのことは、4世紀後半から10世紀初頭にわたり、対外交渉時に航海の安を祈る国家的祭祀の場としての性格をじゅうぶんに物語ってくれるものである。

そのうち、5～6世紀ごろのものとして注目されるものに、カットガラスの碗がある(第1図左)。それは第1次・第2次調査の際、8号遺跡の中央小岩の東北と西南側より同一固体の破片が二つ出土したもので、淡い緑色を帯びている。復元すると、口径約12cmで、上段に9個と下段に7個の円形浮出し切子の装飾をもつものである。そのほかの出土品に、朝鮮半島における三国時代新羅の王陵クラスの古墳から出土する金製指輪・金銅製杏葉・鉄てい・鑄造鉄斧などと共通するものが含まれている。また、朝鮮半島では新羅でのみかなりの数量のガラス容器が出土することを合わせ考えると、沖ノ島出土のガラス碗は新羅からもたらされた公算が強い。このガラス碗については、酷似するものが、はるかイランのギラン州マザンデラン地方の墳墓で出土していることを、東京大学イラン・イラク調査団の深井晋司氏によって明らかにされた。深井氏によると、イラン高原では、パルティアよりササン・ペルシャの時代つまり3、4世紀以降7世紀ごろにかけて、各種のガットガラスが製作されたものと推定されており、その中に、沖ノ島出土品のような浮出し円文をもつものが含まれているのである。

ところが、古代ガラス研究家の由水常雄氏によれば、イラン高原は、出土地が多いからといってただちに製作地でもあったとすることはできず、むしろ古代貿易ルートの集荷地であった可能性が大きいとされる。そして、そのようなカットガラスは、地中海周辺のローマン・ガラスの産地で製作されたものとされる。

日本の古墳時代の出土品には、そのほかに京都市上賀茂神社境内や伝安閑天皇陵古墳でそれぞれ出土したカットガラスがあり、沖ノ島出土品と同じコンテクストで考えられる。

さて、沖ノ島出土の浮出し円文をもったカットガラスにきわめて酷似したものが、シルクロードに当たる地域でも見つかっているのである。それは、敦煌の東南方およそ870kmほどのところに位置する、寧夏回族自治区固原県の県城南部の郷深村で1983年に出土したものである(第1図右・第2図)。このガラス碗は、沖ノ島出土品と同様に、浮出し円文の装飾をもつもので、口径9.5cm、高さ8cmの緑色を帯びたカットガラスである。ちなみに墳墓から出土品300点余りの中には、?金銀製把手付の水瓶があり、ササン時代のバクトリア製品とされる。ところで、この墳墓は、墓誌によると、北周の李賢(503～569年)とその妻呉輝(547年没)の合葬墓であることがわかった。

また、上賀茂神社境内などで出土しているカットガラスは、最近でも1980年に新疆ウイグル自治区の楼蘭古城跡で出土しており、筆者は、1988年の現地調査の際に実見したところである。

このように見てくると、沖ノ島出土のガラス碗のルーツを考えると、シルクロードが大きく浮び上がってくるのである。

シルクロードを経てきたガラス碗

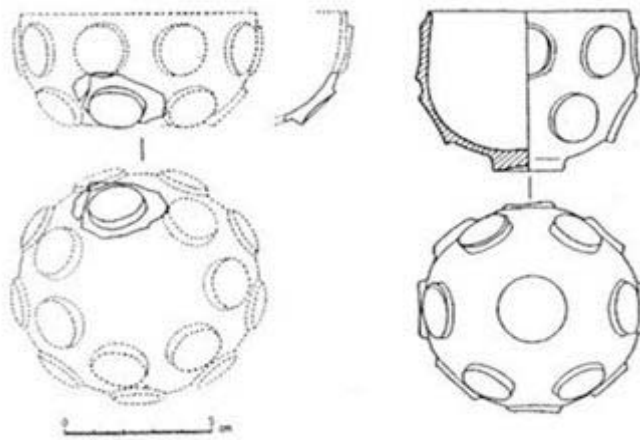
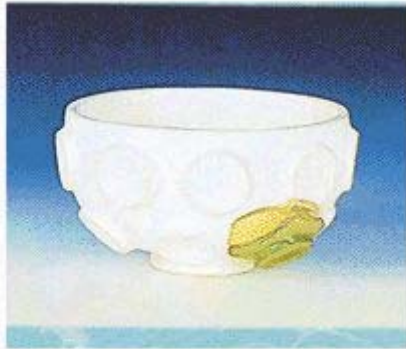


図15 沖ノ島（左）と李賢墓（右）出土のガラス碗



(写真) 沖ノ島8号遺跡からの出土品 復元した方（左）

宁夏回族自治区李賢墓からの出土品 ガラス原型そのまま（右）



図16 李賢墓出土のガラス碗

引用文献

岡崎敬、1979「沖ノ島8号祭祀遺跡出土の玻璃碗」『宗像 沖ノ島』宗像大社復興期成会。

深井晋司、1968『ペルシヤ古美術研究ーガラス器・金属器』吉川弘文館。

由水常雄・棚橋淳二、1977『東洋のガラスー中国・朝鮮・日本』三彩社。

B・I・マルシャーク・穴沢咏光、1989「北周李賢夫妻墓とその銀製水瓶について」『古代文化』第41巻第4号。

（『シルクロード』創刊号、1991年）